

井上流について

権藤芳一

私は演劇の方が専門で御座いまして、舞踊の方は余り詳しくはございません。にもかかわらず、この学会での講演を依頼されましたのは、井上流について研究している人が少ない。まあ権藤は、京都の人間だし、現八千代さんの御主人の故片山博通氏にも可愛がってもらっていたし、その関係で、井上流の方々とも親しいから、あれに頼んでおけ、といったところだろうと思います。

事実、井上流に関する研究は大変少ないのです。ちょっと私が調べましたのをリストにいたしました。が、学問的な研究論文はほとんどありません。芸談、エッセイの類ばかりです。

これまで、井上流だけでなく、上方の舞踊に関する研究が少ないということは、関西には、演劇もそうですが、舞踊研究の組織的な機関——大学や研究所で資料を蒐集し、研究を継続的に行ない、その成果を蓄積してゆくということがなかった。舞踊や演劇（上方歌舞伎）の研究は、個人が趣味的な感覚でやっておられた——町人学者の伝統もあり、大変お詳しい方もありますが、やはりこういう段階にとどまっていたのは限度があります。研究の交流や蓄積がないので発展しません。

井上流に関する資料にしましても、ベースになっているのは、三世八千代が二世八千代から聞いた話です。三世が二世に入門したのが12、3歳ごろとすると、二世は50歳ごろです。それを、三世の晩年に、東京の研究者や三世の周辺の人（孫の片山博通や高弟の佐多女ないし四世八千代）が聞いた話なのです。二世から三世へ、具体的にどのように伝承されたか、他の方面から検証しなければなりません。

ここに私が書きました「井上八千代」（『世界伝記大事典』ほるぶ出版、昭和53年刊）がございません。これを書きます時、これまで書かれた辞典類を全部見直しました。渥美清太郎、加藤長治、小寺融吉氏などが執筆しておられますが、この10冊の辞典の記述にはいろいろ疑問点や誤りがあります。その記事を傍証によって確認すると、再検討するとかせずに、次々と引き渡されて今日に至っている、というのが現状です。それらの誤りを訂正して書きました。

三世八千代談を基にした井上流の研究には限度があります。これからは、他の方法を探さねばなりません。例えば、他の流儀の歴史との比較、京都の歌舞伎や人形浄瑠璃との関係、また所司代や

島原の記録の調査も必要です。亡くなった守屋毅君が、芸能研究には、芸態論と環境論があると言っていました。井上流の舞の特色（芸態論）といった研究は、これまでなされていますが、歴史的、社会的な方面からの研究（環境論）はこれからです。

最近、古井戸秀夫氏の「友五郎の春」（早稲田大学大学院、文学研究科紀要37輯、1991）を読みました。山村流初代友五郎を、まずその父と当時の歌舞伎界との交流から、検討をすすめられている。大変実証的な論文です。井上流の場合にも、こういう研究が必要だと思います。また、平成3年5月、国立劇場での京舞公演の時のパンフレットに書かれた斎藤雅美氏の「上方の舞踊と井上流—江戸唄のこと—」は、井上流の伝承種目から、井上流の歴史と特色を考えようとする、従来になかった角度からの研究である点を注目したいと思います。

つまり井上流に関する学問的研究は、これからだと言うことです。

資料1

〈井上流関係 参考文献〉

一 事典・辞典の類

- 1 日本演劇辞典 渥美清太郎著
(昭19 新大衆社)
- 2 芸能辞典 演劇博物館編
(昭28 東京堂)
- 3 演劇百科大事典 演劇博物館編
(昭35 平凡社)
- 4 世界大百科事典 (昭39 平凡社)
- 5 日本舞踊辞典 郡司正勝編
(昭52 東京堂出版)
- 6 上方演芸辞典 前田 勇編
(昭41 東京堂出版)
- 7 京都事典 村井康彦編
(昭54 東京堂出版)
- 8 京都大事典 (昭59 淡友社)
- 9 大百科事典 (昭59 平凡社)
- 10 邦楽百科辞典 吉川英史編
(昭59 音楽の友社)
- 11 世界伝記大事典
(昭53 ほるぶ出版)

二 芸談・伝記の類

- 1 堂本寒星 佐多女芸談
(昭22 河原書店)
- 2 井上甚之助 佐多女聞書
(昭28 創天社)
- 3 片山慶次郎 井上八千代

(昭42 河原書店)

片山慶次郎 郡司正勝

- 4 京都新聞社編集局編 京舞
(昭35 淡友新社)

(連載「京舞に生きる」)

- 5 京都新聞社 近代京都をきた人々
= 明治人物誌

(京舞を大成させた片山春子)

(昭62 京都書院)

- 7 私の履歴書 井上八千代
(昭34 日本経済新聞社)

- 8 私と舞 井上八千代
(昭58 京都新聞社)

三 歌集

- 1 井上流歌集 第1輯 第2輯 (昭16)
2 井上流歌集 第3輯 (昭17)
3 井上流歌集 (昭26)
4 京舞井上流歌集 監修 4世井上八千代
(昭40)

四 論文・エッセイの類

久保田金罍 日本のをどり「上方」第6号〈京舞特集〉昭6・6

京舞評「演芸画報」明41・1月

名家真相録「演芸画報」明43・9月

小寺 融吉『日本の舞踊』昭和16年 創元社

- (初出) { 片山春子 昭10・6「舞踊新潮」
上方の所作事と座敷舞 昭10・5「上方」
片山春子と山村らくの死 昭13・11「演芸画報」

坪内逍遙『逍遙選集』第3巻 昭和2年

春陽堂(再 昭51)

- (初出) { 日本舞踊の現在及将来 明41・2「新小説」
わが六大舞踊派の特質 大正7・1「新小説」

江馬 務『江馬務著作集』第11巻

昭和53年 中央公論社

(初出)京舞に就て 昭11・3「風俗研究」

片山 博通『幽花亭隨筆』昭和9年 桧書店

- (初出) { 孫のみた井上流 昭3・7
都踊を見て 昭8・4

片山 博通『真の花』昭和17年 丸岡出版社

- (初出) { 京舞井上流のことども 昭10・3
井上八千代芸話 昭9・12
都踊を見て (不明)
都おどり論 昭12・3
片山春子さんを訪ねて 昭12・1

五 写真集の類

北口真理子撮影『女人花伝—徳弥と三千子』

昭和57年 東洋書店

安田 武・桂 米朝

後藤勝一撮影『京舞・井上流』昭和59年 歩書房

片岡仁左衛門 山田庄一

六 パンフレット、番組の類 (省略)

資料2

井上八千代 (権藤芳一執筆)

『世界伝記大事典』(ほるぷ出版刊)

井上流の家元は、代々長寿である。初世が88歳、2世が79歳、3世は実に102歳まで生き、4世も70歳をこえてなお嬰鑠としている。したがって、すでに100年をこえる歴史をもつ流派でありながら、4世を数えるのみなのである。そのうえ、井上流では、親から子へ家元を継承する世襲制をとらず、家元は世間が決める、というたてまえをとり、家元の没後は、同門中の最も優れたものが、自然に中心人物になって、家元を継げばよいとしている。したがって、3世なども、自分は八千代の名は許されていないと、本名の片山春子の名で通していた。97歳のとき、長寿祝賀舞踊会を催すについて、関係者のすすめによりはじめて、3世井上八千代の名で舞台に立った。2世没後71年目である。4世が襲名したのも、3世没後9年目であった。このように、家元襲名を急がないのは、芸術的良心の表れであると同時に家元制度にまつわる経済的特権への淡泊さでもあった。日本舞踊界で大きな位置を占めている井上流は、その人的構成のうえではきわめて人数が少ない。2世の取り立てた名取りはわずか3名であり、3世になってようやく18名となり、4世で急激にふえたが、それでも100名をわずかにこえるにとどまっておろ、いわゆる孫弟子の制度はとらず、すべて家元直門である。それだけ、流儀の純粋性は保たれているが、免状料その他の、家元としての収益は決して多くない。これも他の流儀に比べて大きな特色でもある。

初世 (1767-1854)

初世は、本名井上サトといい1767(明和4)年に生まれ、兄の儒者井上敬助に養育され、幼女より町の師匠に舞を習い、15歳のころには、師匠の代稽古をしたという。16歳のとき、行儀見習として近衛家の老女、南大路鶴江のもとへ奉公にあがり、31歳まで公家の奥向きで過ごした。その間、舞の堪能なことを見いだされ、舞の師匠という格で遇せられ、仙洞御所の局や近衛家の女官に舞を教えた。31歳で宿さがりすると、近衛公より「井菱」の紋と、主人鶴江より「玉椿」の八千代をかけてそなたを忘れぬ」という言葉を頂戴する。これが井上流の定紋、決まりの図柄、家元名の起こりである。はじめ、町の舞の師匠として出

発するが、女官、公家の後援を得てしだいに地盤を固めてゆき、のちには所司代屋敷からも最眞にされ、島原の廓の舞の師匠として、それまでの篠塚流にかわって迎えられる。今日井上流の特色として、品位の高さ、芸格のたくましが指摘されるが、それはほとんど初世によって確立された芸風である。1854（安政1）年12月5日、88歳で死去。

2世（1790-1868）

2世は、本名井上アヤ、1790（寛政2）年生まれ、初世の兄敬助の娘で、のち叔母の養女となる。舞一筋で生きるべく決心し、一生を独身で通した。サトは70歳を過ぎて第一線から身を退き、当時50歳前後であったアヤがそのあとを継いだ、そのころ、祇園町に居を移した。アヤは、能に親しみ、金剛流の野村三次郎に私淑し、この型を舞のなかに取り入れた。また人形浄瑠璃の人々との交流からいわゆる‘人形ぶり’の型を井上流のものとした。アヤによって、初世の作った地唄による座敷舞に、能の味と人形ぶりが加えられ、井上流の特色を大きく広げた。1868（慶応4）年3月1日、79歳で没した。

3世（1838-1939）

3世は、本名片山春子。1838（天保9）年2月1日生まれ、幼女より近くの町師匠から舞の手ほどきを受けたが、12、3歳のころ、井上アヤの門に入った。2世が50歳ごろで、まだ初世も存命であった。春子は内弟子となり、2人の師匠から仕込まれた。2世が没したとき、春子は30歳であった。自然と家元代理的な立場となり、流儀をとりしきった。72（明治5）年東京遷都後の京都の振興策として博覧会が企画された。その余興として‘都をどり’を創始した。序曲から場面を幕なしで展開させながら終曲にいたる組織的な編成は、当時としては画期的な新様式で好評を博した。そのとき、今後祇園町にはほかの流儀は入れない、井上流もほかの土地へは教えに出ない、という約束がかわされたという。春子は、男まさりの性格で、その稽古の厳しさに、見学に訪れた坪内逍遙が驚嘆した話は有名である。観世流能師片山晋三（九郎三郎）と再婚、その娘の夫が観世元義、その2人の孫のうち、兄元滋がのちに観世24世家元左近を襲ぎ、弟博通が現4世の夫となった。このようにして、井上流と能とのつながりは、ますます深くなった。春子は1939（昭和14）年9月7日、102歳の天寿を全うしたが、100歳まで自ら舞台上に立ち、病床でなお指導をつづけるという超人的な生涯であった。京舞井上流を全国的に知名にしたのは、まさに彼女の存在そのものによるところが多い。

4世（1905-）

4世は、本名片山愛子、1905（明治38）年5月

14日、京都に生まれ、4歳のとき3世に入門、13歳のときから内弟子として住み込み、舞の師匠となるべく専心修業にはげみ、のち3世の孫、片山博通と結婚、師匠の没後、3世の高弟松本佐多と協力、井上流を今日の隆盛に導いた。47（昭和22）年4世八千代を襲名、52年芸術院賞受賞、55年重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定、57年芸術院会員に推された。師匠ゆずりの厳格な芸風に加えて巧緻な技の冴えは先代以上と評せられ、多くの支持者を得ている。また振り付けの面でも、才能を発揮している。